

三上 晴子

《スーツケース（World Membrane: Disposal Containers
- Suitcase）》 1992-93

9 点の透明なスーツケースがローラーコンベアに乗っています。まるで空港の手荷物検査場のようですが、さて、中には何が入っているでしょう……。他人のスーツケースの中身を気にしたことはないですが、知らないうちに、様々なものが世界に拡散する現代社会を表現しているようでもあります。1993 年に発表された作品ですが、2011 年の原発事故、2020 年のパンデミックを経験した私たちは複雑な思いに駆られます。これで終わりではない、繰り返すかもしれない未来に備えよ、というメッセージが聞こえてきそうです。



三上晴子 《Scale》 1993



ガイドスタッフK

展示室の入口、立ちはだかるかのような壁に整列した15の突起物。足元には白いタイルの上に体重計が置かれ、無機質で清潔な空間を思わせます。壁についているのは水圧を調整できるシャワーヘッドです。少しずつ角度のずれたそれらが一斉に開栓したら…と想像すると、暴力的なまでの洗浄と身体への管理を強いられているような圧力を感じませんか？制作年から30年、コロナ禍を経て、未来の私たちのいまの光景と重なり合うような見方ができるかも知れません。

方力鈞 《1993 No.11》 1993-94

1963年生まれの中国出身の画家、方力鈞（ファン・リジュン）は裕福な家庭に生まれました。それゆえに1966年からの約10年に及ぶ文化大革命期には学校でいじめられるなどの辛い体験をして成長しました。また、若者による民主化運動である1989年の天安門事件も目の当たりにしています。そんなファンの作品からは社会に対する皮肉めいた態度が感じ取れます。描かれている男性はそんなファン自身です。水に真正面から挑まず静かに泳ぐ姿は、ともすれば自分を飲み込みかねない水（社会）の存在の大きさを暗示しているかのようです。



ガイドスタッフY

平川典俊 《S》シリーズについて 1997

崖の上から足元を覗き込んだモノクロ写真。何を写したのだろうとタイトルを見ると、「S」で始まる暗号のようなアルファベットの羅列。実は「暗号」は、飛び降り「自殺 (suicide)」があった、「スイス (Swiss)」の地名。写されているのは、亡くなった人が、人生最後の数秒間で見たであろう景色です。その刹那の映像が、自死により暴力的に断ち切られた時間の流れのように、1枚の写真となって静止しているかのようです。写真を見詰めていると、生から死へと移る瞬間、その人が何を思っていたのか、さまざまな考えが浮かんでいきます。



小沢 剛 《地蔵建立》シリーズ

小沢剛は 1965 年東京に生まれ、東京藝術大学在学中の 1988 年に行った毎日 2 時に陶芸用粘土で作った老婆の頭部を様々な場所に置いて撮影するという行為をきっかけに、地蔵の人形を世界各地の風景と共に写真におさめる《地蔵建立》シリーズを開始しました。又、その後、日本でも毎日人形を写すようになり、旅の記録であったものが、日常の記録に変化しています。地蔵には、癒しや祈りの気持ちが込められているそうです。写真の青色は夕暮れどきの濃い青の空をイメージしたものです。



伊庭靖子 《Untitled 2009-02》 2009

布の素材感が伝わってくるような、クッションの絵。伊庭靖子は、作品を描く際にまずモチーフを撮影し、その写真をもとに制作します。そのため、写実絵画のようにリアルに見えますが、淡い色彩の画面は、作家の目線で光やまわりの空気感をも捉えています。さらによくみていると、今度は植物模様が浮かびあがって、「クッションの柄」というよりは、「生命ある花」がのびているようにみえませんか？伊庭さんの作品は、まるで絵画の世界を旅しているかのように、みなさんの目線をいざないます。



名和晃平 《PixCell-Deer #17》 2009

作家はモニター（ピクセルの集合体）を見てインターネット上で鹿の剥製を選んで購入します。届いた鹿の表皮に大小のクリスタルガラスの球体を隙間なくつけていきます。表皮にある一つ一つの球はピクセル（画素）となって光を反射し、それはやがて集合体になり、離れて見れば確かに鹿に見えます。しかし、顔を近づけて見ると光の屈折や反射で実体はよく分からなくなります。つまり、モニターの画面と同じようなことになってしまう。私たちは実体を見ているのでしょうか、虚像を見ているのでしょうか。美しくて不思議な作品です。



トーマス・デマンド 《制御室》 2011



ガイドスタッフH

美術館では「あ、これ見たことあるけど何だっけ…」と思う作品に出会うことはありませんか。あなたにとって、これもそうかもしれませんね。整っているようで、天井が外れファイルが雑然と置かれた制御室。ここでは何が起きているのでしょうか。作者は社会的な出来事などの画像から紙で実物大の模型を作り、それを写真として記録しています。こちらは2011年の作品。そう、東日本大震災で事故のあった原子力発電所をテーマとして作られています。現実から何層も画像を重ねてあなたの元に届いています。あなたは何を感じますか。



ガイドスタッフ F

金氏徹平

《White Discharge（建物のようにつみあげたもの）#4》

2009

こちらの作品、よ〜く見ると、フィギュアやら石けん入れやらおもちゃなどでできているのがわかります（近づきすぎに注意!）。作家が既成の日用品を積みあげ、その上から樹脂を流したシリーズです。雪の積もった京都を散歩中、知っていた景色が一晩にして全く違うものになっていたこと、そしてベンツと犬のフン(!)が雪によって一つになっていたことから思いついたそうです。日用品の用途が樹脂により流れ出し、解放(discharge)され、新たな意味を生み出す。意味という「被膜」が再構築される作品です。

千葉正也 《タートルズ・ライフ #3》 2013

タイトルを見てまず探しますよね、亀。います！
ど真ん中の水槽の中。水槽を囲むように置かれた
モノ、モノ、モノ。作者がこれらを亀に見せたかった
のか、はたまた亀さんが普段暮らしている所（右下の
写真の絵に注目）にあるお気に入りのモノなのか…。
モニターも二台ありますね。人が映っています。
この作品は、周到にセットを組み公開制作された
もので、モニターに映るのは、実物の亀や制作中の
作者を見ている人々。彼らはライブで見つつ、
亀にも見られ？つつ。ちょっと複雑構造ですが、
とりあえずは質問を一つ。もしもし亀さん、何思う？



潘逸舟 《戻る場所》 2011

荒れる海に裸で立ち向かう男。波間から男に衣類が投げ与えられていく様は、自然の猛々しさとともに、自然に生かされている人間の小ささを暗示しているかのようです。上海で生まれ、9歳の冬に青森に移り住んだ経験が自らの表現の根底にあると彼は言います。それは否定的なものではなく、環境の変化を自然に受け止め、自分が何者かを考えさせる契機となったそうです。ちなみに潘はひとりで短編映像を制作します。つまり演じるのも潘自身。作品のシリアスな意味合いとは裏腹に、裸で海辺をうろうろする作家の姿を想像すると、また別の面白さがあります。



梅沢和木

《とある現実の超風景 2018 ver.》 2011/2018-2019

これはアニメのキャラクターかな？ ずいぶんカラフルだけど、壊れた家や車の写真もある。なんだろう、怖い感じがする。そうです、2011年東日本大震災の後に制作された作品です。

作家は中高生の頃からゲームやアニメが好きで、インターネット上にあふれるイメージをオタク的に収集し、膨大な画像を画面上で貼り合わせて出力した上に絵の具で加筆し、新しいイメージを生み出しています。震災の現実には作家にも大きな影響を及ぼし、現実と空想が混じり合ったカオスのような世界が圧倒的な力で見られる者にせまってきます。



ガイドスタッフ T

サム・フランシス 作品全体



ガイドスタッフT

見渡すと、いつの間にかトビウオになった気がしました。光に反射し多彩に輝く水面をぴょんっと跳ねて、上に、前に。なんて気持ちがいいんでしょう！縦長の5つの作品は、光をいっぱい浴びてプクプクと光合成をしている大きな海藻のようにも思えてきます。海藻の周囲の色の塊は魚でしょうか？

大胆な余白と鮮やかな形状の力強い組合せに始めは圧倒されますが、眺めるにつれ形状はみずみずしく、その周りに溢れる細かな飛沫や線は、見るものを優しく包むようにいざないます。貴方もこの海に身を委ね、不思議で自由な世界を体感してみませんか？

デイヴィッド・ホックニー リトグラフ作品について

ホックニーが1978年から手がけた版画の「水の
リトグラフ」のシリーズ。企画展でも「リトグラフ
の水」が4点出品中ですが、印象は似ていても、
こちらの7点とは別の作品です。手書きの筆跡を
活かして製版できるリトグラフという技法で制作
されています。プールの光景をホックニーは水面
はもちろんのこと、日影や物陰すらも青と緑の2色
の濃淡だけで表現しています。明るく開放的な
カリフォルニアの色彩に黒は似合わない…
と考えたのかもしれませんね。

同じ版を使って色を変えながら版を重ねて制作
していますが、どれが完成ということではない
のでしょう。



ガイドスタッフY

ジャスパー・ジョーンズ 《うすゆき》 1980

ポップ・アートの先駆者として著名なアメリカ出身のジャスパー・ジョーンズ。実は日本文化への関心も高い作家です。こちらの作品、タイトルをみて皆さんお気づきだとおもいますが、《うすゆき》（日本語）です。はじめは人形浄瑠璃、のちに歌舞伎演目となった「新薄雪物語」から、「うすゆき」という言葉に興味をもち制作しました。すぐに消えてしまう「はかなさ」や「うつろい」がタイトルから表れている一方で、とても複雑な工程をへてつくられた作品は、長く人々をひきつけるものになりました。素材には、京都の黒谷楮紙が使われています。



宮島 達男

《それは変化し続ける それはあらゆるものとの関係をつなぐ
それは永遠に続く》 1998

何のカウンター？

電光掲示板のような赤いカウンターが点滅してるよね。

まず、1分間眺めてみて。（～1分経過～）

どうでした？

0が点灯していないし、進む早さもバラバラだよ。

でも実は、バラバラに見えても、カウンター同士がつながっているところがあるよ。どこかが消えると、どこかがつく数字もあって、画面全体にリズムが生まれている。人それぞれの違いや、生命のリズムを刻んでいるようにみえませんか。



アンソニー・カロ 《シー・チェンジ》 1970

「鉄」といえば硬く重い工業用の材料をイメージする方が多いでしょう。1959年アメリカで見た抽象彫刻に刺激を受け、カロは鉄に赤や黄などの鮮やかな彩色を施し、台座を取り払い、軽やかで自由な形を生み出しました。新しい鉄の彫刻の誕生です。海の変化を表すタイトルの通り、明るいブルーグリーンの海、刻々と変化し、足元に打ち寄せる柔らかな波、穏やかな波の音が聞こえてきそうな感じがしませんか。お帰りの際には1階展示室入り口から外を眺めて下さい。カロの《発見の塔》が見えます。開館時からずっとここで私たちを楽しませてくれています。

みなさんは何を感じられますか？



ガイドスタッフT

アルナルド・ポモドーロ

《太陽のジャイロスコープ》 1988



ガイドスタッフI

ジャイロスコープは船や飛行機の針路を定める時に使われる道具です。絶対の安定性と信頼性が求められます。作品を見てみましょう。とても力強く、合理性を感じます。でも気付きましたか。そこにある鋭い裂け目に。作者のポモドーロによれば、この裂け目は深層意識を表現しているのだそうです。合理性と深層意識が共存しています。この作品を見ると私は自分の人生を思います。岐路に立ち人生の針路を定める時には合理的な判断を心がけ、人生を送ってきたように思うのですが、そうでなかったこともあるなど。それは、それでよかったなど。

オノ・ヨーコ

《インストラクション・ペインティング》について

真っ白な余白のあるキャンバスに言葉がひとつずつ描かれています。鑑賞するには少し仰ぎ見る必要があります。切り取られたひとつひとつの言葉は、日常の会話で使われる時とは、異なるものにも思えてくるかもしれません。誰にでも開かれているようで、それは「私」だけのために向けられた言葉のようにも感じます。一つの言葉に惹かれましたか？横に並んでいる言葉と結び付けて、あなただけの詩を紡いでみましたか？

このような形式のアートはインストラクション（指示）と呼ばれますが、この作品はむしろ、私たちの心を自由に解き放ってくれるようです。



ガイドスタッフ N

トミエ・オオタケ（大竹富江）《Untitled》 2008

ゆるやかに、のびやかに、自由に進む白い曲線。「見る人の感じ方を大切にしたい」と作品に題はつけなかったそうですが、あなたはどんなイメージをもちましたか？

オオタケは1913年京都で生まれ、ブラジルへ移住。独学で絵を描き始め、幾何学的な抽象絵画や彫刻を制作し、2015年に101歳で亡くなるまでブラジルを代表する作家として活躍しました。

大正生まれのハイカラ女性が遥かブラジルで好きな道を極めて成功を修める、なんて素晴らしいのでしょうか！その精神が作品にも表れていると思いませんか。

ガイドスタッフ T



鈴木昭男

《道草のすすめ - 「点音（おとだて）」 and "nozo mi"》

2018-19

《点音》は美術館内と敷地内に点在する12個の白くて丸いプレート。《no zo mi》は屋外展示場にある5つの階段状のもの。足とも耳とも見えるマークが目印。見つけたらたぶん乗ってみたいくなる、そんな作品です。美術館で作品に乗っていいの？ そう思われるかもしれませんが、子どもの頃、駐車場の車止めブロックのような地面から少し高いところについ上ってみたいくなりませんでしたか？ そんな気持ちのまま、ぜひ《点音》に乗って、耳を澄ましてみてください。

12の《点音》の場所の地図もご用意しています。

手に入れて探検開始です！



ガイドスタッフ Y

文谷有佳里 「ライブドローイングについて」

美術館のガラス面がここだけ華やか！ 2019年7月24日の公開制作で、仕上がって行く様子をお客様が直接見られるライブドローイング。一発勝負です！

黒くのびやかな線は作家の想いを乗せて高い所まで続きます。時には『そのペン書きやすいよね』などとお声もかかり、お客様との会話を楽しみながら和やかに。作品制作を通じて人とのつながりを大切にしています。私も挑戦したくなります。建築家が図面を描く様に、音楽家が作曲をする様に、描かれた作品からリズムカルなメロディーが聞こえて来るでしょう。コレクション展の入口にふさわしい作品です。



ガイドスタッフ 〇